

今、見頃の植物 平成21年12月29日【長崎県亜熱帯植物園】



1. ジャボチカバ フトモモ科、ブラジル南部原産。
 名称はブラジル先住民トゥピ族の言葉で『亀のいる池』という意味とされています。別名にブラジリアングレープツリーとも呼ばれ、果物として食用に栽培されています。
 ジャボチカバの最大の特徴は、樹の肌に直接花を咲かせ、そのまま果実になります。写真の白いかたまりが花で、3~4cm程の巨峰に良く似た実を付けます。
 食べた感触はライチとブドウを合わせたようで、かすかな酸味と強い甘みがあります。
 ブラジルでは一般的に市場で販売されているようですが、日本では大変珍しい植物だと思われる。
 以前、ジャボチカバが結実しましたと全国ニュースで言っていました。その際にも、大変珍しいとのコメントでした。
 ジャボチカバは食用として3種類がありますが、葉の先端がギザギザか、実の大きさが違うくらいの差しかないようです。
 当植物園の、果樹温室にあるジャボチカバは1年に2度ほど実をつけます。調べてみると、四季成りで熱帯ではいつでも収穫が出来るとの事でした。実の横に花が咲いているのも納得です。



2. サンゴアブラギリ トウダイグサ科、西インド諸島、中米原産。
 珊瑚油桐と漢字で書くと、確かに葉は桐に似ています。
 花の形態が海の珊瑚に似て実から油が採れるから珊瑚油桐。まったくもってその通りですが、桐はゴマノハグサ科ですので別属です。トウダイグサ科の植物には有毒なものも多く、この珊瑚アブラギリも例外ではなく毒をもっています。
 以前、この植物の油には毒素があるため虫や鳥に実を採られずに採取できるため、商用栽培をしてガソリンの代用にするという話を聞いた事がありました。
 1ヘクタール当たりの油収量がトウモロコシが145kgに対し、サンゴアブラギリは1590kgも採取出来るそうです。
 原油を精製する際のCO2排出量を考えるとエコですが、ガソリンのコストが下がった今は、中止していると聞きました。



3. カリアンドラ マメ科、中南米原産。
 テキサス、カリフォルニア、メキシコが原産のカリアンドラ族の低木。花の形状が、女性が使う化粧パフに似ていると言う事でレッド・パウダーパフとも呼ばれています。
 日本ではネムノキを赤くしたような花なので、ヒネム(緋合歓)とかベニゴウカン(紅合歓)と呼ばれます。
 花に見えるのは雄しべの集合体で、花は小さくて目立ちません。
 カリアンドラ・ハエマトケファラは、白と赤の花が咲きます。
 カリアンドラ・エリオフィラは緋合歓のことで、扇状の花が特徴。冬から春にかけて、大温室でひと際目立っています。



4. ドンベヤ アオギリ科、アフリカ・マダガスカル原産。
 アフリカ・マダガスカルに200種類以上が分布する常緑性の低木。ピンクや白、赤など花色は品種によって変わりますが、紫陽花の様に固まって咲きます。
 日本では主にピンクの花を咲かせるドンベヤ・ウォリックキー(写真5)白に少しピンクが入るドンベヤ・ブルゲッシアエ(写真4)などが出回っています。冬に開花する珍しい熱帯花木です。
 ギザギザのある大きな葉を持つのでアオギリ科と解ります。
 ピンクボールとかピンクスノーボール(ピンクの雪玉)とも呼ばれます。
 ドンベヤという名前はフランスの植物学者Dombeyにちなんで名付けられました。



5. コルディリネ・テルミナリス リュウゼツラン科、東南アジア、ニュージーランド、オーストラリア原産。
 和名を『センネンボク』として園芸店でも良く見かけるようになりました。同じ『リュウゼツラン科』の『ドラセナ属』と混同されますが、本種は『センネンボク(テルミナリス)属』です。
 幸福の木の名前の由来は、ハワイの広葉ドラセナの『コルディネ・テルミナリス・ティー』から由来していると言われています。
 コルディリネは別名『ハワイアン・グッド・ラック・プラント』と呼ばれ、儀式やフラダンスの腰ミノなどに利用され縁起の良い植物として親しまれていましたが、いつの間にか『ドラセナ』の事を、日本では幸福の木と呼ぶようになりました。本当はこちらが本物の(幸福の木)です。
 (写真6)はコルディリネ・テルミナリスで(写真7)はコルディリネ・ストリクタ(青ドラセナ)と呼ばれています。
 結局、混同してしまっているようです。

